
魔法少女リリカルなのはViVid ～RUN,RUN,RUN!!～

キョン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはVivid ～RUN、RUN、RUN
！！～

【Nコード】

N8932V

【作者名】

キヨン

【あらすじ】

初等科四年と中等科一年の生徒の鮮烈な（作者的に五里霧中な）物語

コラボやキャラ貸し出し等は常時受け付けております。是非ご連絡を。

0 / Notice

「ミクト・ランウェルです。将来の夢は陸戦魔導師です。よろしく
願いますッ」

桜の花が咲き、時に舞う季節。

この季節は旅立ち・別れの季節でもあり、出会いの季節でもある。

「高町ヴィヴィオです！」

しかし、別れというのはすぐにやってくる訳ではない。

学生であるならば、その校を卒業する時が別れとなるということ
だ。

「皆さんも今日から四年生です。真面目に勉強に取り組んで、立派
な大人になれるよう頑張りましょうっ！」

「っはい！」「っ」

子供達は新たな思いを胸に未来へと踏み出す。

「シノ・カラスマ」

「アインハルト・ストラトスです」

それは、誰も変わることはない。

魔法少女リリカルなのはVivid ~ RUN・RUN・RUN

！！！

鮮烈な物語の、始まりです――。

1 / O n e d a y

朝。

カーテンの隙間から差す朝日に照らされて目を覚ます。

「ふにゆう〜」

ベッドで寝ていた若葉の新緑色の髪の少年は寝返りをうつて朝日とは逆を向き布団に包まる。

昨日も早く寝た筈だが、何故こつも眠いんだろう。

心地よい微睡みの中、ゆっくりと快楽の感覚を傍らにやってくる睡魔に再び身を委ねて――、

「ミクト君！ 朝だよー！」

――出来なかった。

部屋に飛び込んで来た金髪少女はカーテンをシャツとレールから外れるんじゃないかという勢いで開けて少年の布団を剥ぎ取る。

「うにゃあ〜……」

快眠道具が消えた少年は手探りで布団を探すが見付けられず、かわりに手に当たった普通の枕を掴んで抱き枕にしようとしたが、

「没収〜！」

それすらも少女に取られた。

大変だ、快眠道具が何一つ無い。

「みゆう……」

最後の抵抗とばかりか、少年はベッドの端っこへもぞもぞと移動する。

「むう……。ミクト君早くしないと学校始まっちゃうよー!」

今日は学校の日である。

「ああああああああああああああああああッッッッ!……!」
完っ全に忘れてたあああああッ!……!」

するとあら不思議。今まで決して起きようとしなかった少年が飛び起きてものすごい速さで部屋の中を駆け回り始めた。

そして五秒で制服に着替え終える。実に早い。まさに神速。恐らく早着替え大会なるものぞあれば一位は確実なぐらいに。

「クラッッ!」

『へいへい、ここにいますよっ、と』

相棒の名を呼ぶと深緑色の水晶体——インテリジェントデバイスが飛んでくる。

『これギリギリ間に合うか間に合わないかの瀬戸際だな』

「あわわわ……行こう!」

「うんッ」

少年と少女は家を飛び出して学校へと駆け出した。

——互いに手を握りながら。

*
*
*
*
*

中等科教室。

時間は放課後となり、教室内の生徒もまばらとなり始めた頃。

「……妙に騒がしい気がするのである……」

少年は窓から見える景色を見ながらポツリと呟いた。

「……ストラトスよ、少し尋ねて良いであるか？」

何故騒がしい気がするの、少年は隣の席に座る女子生徒に尋ねてみることに。

「はい」

「妙に騒がしい気がするのだが、今日は何か特別な日であつたか？」

女子生徒は数瞬思考した後、

「多分何もないかと思います」

と首を横に振った。

「そうであつたか。いらん世話をかけたな」

少年は取り敢えず正面に座り直して向き、

「……………」

……………暇になった。

「……………暇、であるな……………」

「そうですね……………」

「む……………」

ただ単なる独り言のつもりで呟いてしまったものだったのだが、女子生徒が反応する。

確かに反応してしまうのは仕方ないかもしれないと思われる。ほんのついさっきまでコミュニケーションを取っていたのだから、少

年の口調もそれに重なって彼女は反応してしまったのだろう。
話が出来そうな流れだ。暇潰しにも丁度良いと考えて少年は話題を振ってみることに。

「……ストラトスは何か、習い事なるものはしているのであるか？」
「習い事……ですか……」

「うむ。特にジャンルは問わぬよ。格闘技だのピアノだの何でも構わんでな」

「……すみませんが、私は特に何も。ただ、いつも体を動かすようにしています」

「うむ。良い心掛けであるな。流石は首席である」

「そ、そんな……。首席って言ったって一時的なものですし、カラスマさんも殆ど成績も変わらなくて次席じゃないですか」

「うむ、次席であるな。……しかし、女子おなこに負けたとなるとプライドなるものが傷付くのである……」

「そう言えば、カラスマさんは何かしていらつしやるのですか？」

「うむ。ストライクアーツを軽やかじっておるよ。他は独学の我流のようなものである。とても人に見せるようなものではないのであるがな」

「凄いですね。どれくらいの種類の格闘技があるんですか？」

「むう……。そこを聞かれるとは……。自分もそこは把握しておらぬのだ。数は一桁ではないことは確かであるが……」

「二十近く、とかですか……？」

「それぐらいか、もしくは更に多いのである」

「……」

「？ どうしたのであるか、ストラトス？」

「い、いえ……。カラスマさん、改めて凄い方だなあと……」

「褒めても何も出るのであるよ。……しかしストラトスよ。その敬語はどうにかならぬのか？」

「こ、これは……。で、ですが、カラスマさんこそいつもその口調ですよ?」

「うむ。これはコンプレックスなるものであるのだ。直す気はせんし、恐らく一生このままであろう。それに少し気に入ってもいるのだよ」

「……ごだわり、ですか?」

「うむ。これが無くては後に何も残らぬであろう? だからこそ、敢えてこだるのである。ストラトス、主もその口調はごだわりであるか?」

「い、いえ…何と言うか、クセのようなものでして……」

「そうであったか。無駄口であった。…しかし、それが主であろう。しかと胸を張って堂々行けば良い。周りを気にしておれば、精神が保たぬよ」

例で言えば主の目の前にいる人物のように生きて行けば問題は無いのであるよ、と少年は笑った。

「……うむ? いつの間にかかなり時間が経っておるな」

「あ、本当ですね……」

教室には二人以外の影は一つも無く、差し込む夕日も紅くなり始めている。

「では、私はこれで」

少女は荷物を纏めて立ち上がる。

「用事であるか?」

「え、う……はい……」

「そうか。ならば深くは聞くまい。頑張るが良い」

少年が尋ねると少女は俯いてしどろもどろとなってしまう。

それを察してか、彼は追及はしなかった。

少女もそれに驚いたのか、「あ…、ありがとうございます……」
と小さくお礼を言った。

「…別に礼を言われるようなことを言った覚えは無いのであるが？」

少年は首を傾げる。

予想してなかったのか、少女はあたふたと赤くなりながら必死に
何か言おうとするが、

「……………」
「……………」

口をパクパクとさせるだけで何も言葉は出て来ず……。

「で、ではッ、また明日ッ、し、失礼しましたッ！」

鞆を引っ掴んで逃げるように退室。「うむ。またなのである」と
いう少年の声を遠巻きに聞きながら少女は早足で下校するのだった。

「……………ふむ。また暇になってしまったのである。……仕方ない。
本でも借りるとしよう」

少年——シノ・カラスマは鞆を持って図書館へとゆとりある足取
りで向かった。

* * * *

少女——アインハルト・ストラトスは走りながら自分の顔が暑いを感じた。

太陽の所為だろうか？

(……どうして「また明日」なんて言ってしまったのでしょうか……)

頭の中で自問自答を繰り返す。

さっきからずっと“あの時”のことを考えてばかりだ。

「……私は、可笑しくなってしまったのでしょうか……？」

その質問に答える者はいない。

でもきつと、ここに“彼”がいたら「主は可笑しくなっておらぬよ。…そうであるな、それはきつと——である」と言うだ

ろっ。

(…………あれ？ 彼は何と言ったのでしょうか…………？)

ほんの一瞬前までわかっていたのに、忘れた。

彼は何と言っ？

…………。
…………。

…………。
…………。

…………。
…………。

——刹那、アインハルトは顔を真っ赤にした後、ブンブンと首を大きく横に振った。

*
*
*
*
*

「……うむ。また世話になるのである」

シノ・カラスマはそう言いながら校内の図書館内入り口を潜った。ここにはかなりの回数世話になりっぱなしである。本も読めるし、何より静かなのが彼にとってとても居心地が良いのだ。

「……うむ、またあの四人であるか」

適当にふらふらしながら本を探していると、またいつもの四人グループを見つけた。

見るからに初等科中学年。聞こえてくる会話の内容からして四年生だと断定出来る。

「……まあいつものことであるか」

シノは自嘲気味に苦笑し、本棚に目を戻した。

「ふむ。ベルカの歴史、であるか……」
彼の場合、読む本はいつも気紛れで決定される為にジャンルは様々だ。

今回も偶々見付けた『古代ベルカの歴史』という本を引っ張り出

してパラパラと捲る。気に入ればそれを座って読むのが彼のクセ、
というか習性である。

「ふむ。これにするとしよう」

それなりの厚さの本だが軽々と持ったまま机のある所へ。

丁度空いている席を発見。その近くにはあの四人グループが。
さして気にした訳でもなかったのだが、その内の若葉色の髪の子
と目が合う。小さく「どうも……」と会釈するのに対し、シノも「
どうもである」と軽く頭を下げた。

「？ ミクト君知り合いだったの？」

「え？ いや、いつも見る方だったからつい……」

彼らの話題はどうやら自分らしいと判断する。気にしない訳でも
ない。やはり気になってしまう。話に聞き耳を立てつつ手元の本の
ページを捲った。

この出会いが、鮮烈な物語の始まりである――。

1 / O n e d a y (後書き)

初めまして、かな？

キノンと申します。

この度は『魔法少女リリカルなのはVivid』RUN、RUN、
RUN！』をご覧いただきありがとうございました。

この話はそれなりに出来るオリキャラ達が織り成すほのぼの系になるかと思われます。

あらずじに書いた通り今現在五里霧中であります。

衝動的に書いた、けど後悔はしてません。

反省？ なにそれ？ おいしいの？

不定期更新となりますが、これからよろしく願います。

では（「、D、」ノ

2 / Wonderful?

最近少し気になる事件が起きている。

格闘家ばかりを狙った連続障害事件。犯人は自らを“霸王”と名乗るらしい。

「中々に物騒な事件であるな」

何故「らしい」のか。それは彼、シノ・カラスマが人から聞いた話だからである。

「……“霸王”、であるか……」

偶々だろうか。先日読んだ本は『古代ベルカの歴史』。無論、そこにはベルカ時代の王であった『“霸王”イングヴァルト』のことも記されていた。

「……ふむ。物騒ではあるが、興味深くもある」

関わってみるのも面白karou。

シノは小さく口元に笑みを浮かべて夕方の街へと繰り出した。

犯人と接触するにはまず格闘家が現れる場所に行かなくてはならない。

しかし、目的はそこではなく、格闘家がよく現れるその周辺。犯人はそれなりに顔が（仮面を着けているが）知れてる故あまり表立った行動はとれない筈。襲撃場所も聞いた限りはあまり人目の入らない場所であることから犯人は周辺に現れる、と推測した訳だ。

その為にまずは公共魔法練習場へと赴く。大抵ここにも格闘家が現れると予想したのだが、近いのもあつてここに来たのだ。

「……ふむ。狙われる可能性があるとするれば…、八人中二人と言ったところであるか」

練習場に人影は十。その内二人は格闘家らしくない。そして残りの八人の内一人は巷でも少し話題にあがる人物だ。周りは未だに気付いていないようだが、シノはわかる。

「……む？」

他の者を観察していると、二人程見知ったような顔触れを発見した。

金髪に緑の赤のオッドアイの大人。若葉色の髪をうなじで束ねた子。

あちらも気付いたらしく、動きを止めて軽く会釈をしてきた。不思議に思い、シノも頭を下げながら二人の下へと向かった。

「……主ら二人……、こっちはわかるが、主にも会ったことがあるかの？」

若葉色の髪の子は図書館でよく顔を合わせる。が、金髪オッドアイは図書館で見る娘に似ている。

「ああ、そっか！ スミマセン！ モドリリス 変身解除！」

金髪の女性が光に包まれた後、光が晴れたそこにはあの少女がいた。

「おお、主はやはり図書館の！」

図書館で見た四人組。その内の二人だ。

「やはり主であつたか。魔力が同じ故、不思議に思つたのである」

「アハハ、すみませんでした。こちらの不手際で……」

「気にする必要は無きに等しい。人間誰でも間違いはあると言つものである」

自分もよく間違えたものである、とシノは付け足す。

「うむ、自己紹介がまだであつたな。シノ・カラスマである」

「高町ヴィヴィオです！ それと……」

と、後ろで控えていた若葉色の髪の子を前に出した。

「あ、と……ミクト・ランウェルと言います」

ペコリと頭を下げるミクト。

「高町にランウェルであるか。よろしくである。しかし……」

何故かそこでシノは渋った顔になりながらミクトの爪先から天辺までくまなく観察してから口を開く。

「……ランウェルよ、主は中性的な顔立ちをしておるが……男であ

ろうか？」

彼が渋ったのはそういうことだった。

ミクトは端から見れば中性的過ぎて、いざ女子に交ざれば男子に間違われることは無いだろう。いや、絶対。

「は、はい……。よく女子と間違われるんですけど……。これでも男子です」

わかりにくいですよ、とミクトは寂しそうに苦笑した。

「寂しがる必要もなからう。主は主であるのだ。個性がある方がずっと良いのであるぞ」

コンプレックスを自ら作り上げたシノに対し、ミクトは中性的な幼さというコンプレックスを元から持っているのだ。「個性があるのは羨ましいのである」とシノは呟いた。

「？ でも、カラスマさんも面白……。独特な口調じゃありませんか？」

「面白い口調でも構わぬよ、高町。これは自分専用のコンプレックスであるのだ。これが無ければ何も残らぬよ」

それにもう直らないのである、と付け足してシノは苦笑した。

「……そう言えば主らは鍛練であつたか？」

「はいっ、ママも一緒に！」

「僕は付き添いです」

高町の母であるか？ とシノは辺りを見回すが特にそれらしき人はいない。

「ご紹介します！」

探していると、ヴィヴィオが「ついてきて下さいっ」とシノの手を引き、母である人物の下へと向かった。

「ママ〜！」

その母という人物を見てシノは目を見開いた。

ヴィヴィオは金髪なのに対し、その者は茶髪なのだ。

「紹介します！ 私のママ！」

「む、おお…シノ・カラスマと申す」

「こんにちは。ヴィヴィオのママの高町なのはです」

“高町なのは”。そう聞いてシノの神経が更に騒ぐ。

高町なのはと言えば管理局の“トーストフエース白い悪魔”。あのJS事件を解決に導いた部隊の一員だ。

「ヴィヴィオ、こちらの方は？」

「学校の先輩。よく図書館で会ってたんだ」

会っていたと言うよりは目が合っただけである、とシノは言い掛けたが取り敢えず喉まで出かかった言葉を飲み込んでおく。

「カラスマ君って…、もしかして地球出身の人？」

シノ・カラスマ。確かに入れ換えれば“鴉魔 紫之”となる。

「父母は地球出身であるが、残念ながら自分はミッドチルダにて生まれた身である」

彼の父母は父が管理局員で、地球に任務で訪れた時に母を見て一目惚れだったらしい。しかも丁度その任務の事件に母が巻き込まれたのを父が助けだし、母も父に惹かれて二人は結ばれた、という訳だ。

「へえ、ロマンチックな夫婦だねえ」

「今も人の目があるうと関係なくくつついてるであろうよ」

「フフツ、アツアツなんだね。憧れちゃう」

ユーノ君相変わらず鈍いからなあ、と呟くがシノは突っ込まずにスルーしておく。

「……高町殿は高町… ヴィヴィオの身元引き受けか保証人といったところ、であるのか？」

「んー、まね」

なるほど、それならば納得できる。

ヴィヴィオとミクトはまた自手練を再開していた。

ヴィヴィオはストライクアーツ。ミクトは射撃練習だ。

「……良きコンビであるな」

前衛後衛の役割を担えるのは良いことだろう。管理局に入ってコンビを組めば間違いなく有名になれる。

「カラスマ君は何か格闘技を？ 観察眼がしっかり出来てるみたいだけど」

なのは笑顔だ。

しかし、シノは内心かなり驚いていた。
いつこちらを観察した？

「うむ。ストライクアーツ、後は独学の我流もどきである」

焦りは出さずにあくまで冷静な態度を続ける。

この時、なのはでさえ彼が仮面を被っていたのを見破れなかった程に彼は落ち着いていたようだ。

「ストライクアーツかあ。じゃあ先輩から見てヴィヴィオの型はどうかな？」

「ふむ。まあ良いのではないか？ こちらとしては学べる要素の方が多いのであるがな。……ただ、ストライクアーツから外れれば少し無理な負荷がかかっているのである」

「へえ、流石だね。私にはわかんないや」

「本人にも感じ得ぬ負荷なのだ。周りから見ても当然である」

しかし、とシノは言う。

「動きはそこまで悪く無い。寧ろ良いのである。それに、あれはただ一人鍛練すれば付くようなものでは無きに等しい。誰か師でもいるのであるか？」

「うん。私の元愛弟子の姉妹の一人が師範してるんだ。結構強いよ」

「……ふむ。一度手合わせしてみたいものである」

「なら、ヴィヴィオとやってみたら？ ヴィヴィオにも良い経験になるかもしれないし」

「良いのであるか？」

大丈夫大丈夫、となのは言う。

シノは正直気が引けていた。

彼とてこれでも心優しい（と思われる）男子だ。女子に、それも年下に手を出すというのは極力避けたいところである。

（……手加減すれば良いのであるか……？）

困惑しながらシノは思考した。出来るならば、勝負は避けれるように。

2、Wonderful? (後書き)

とゆるかミクト空気www

いつかいっぱい出してあげなきゃ……

ご感想等お待ちしております。

ではまた次回。

3 Investigation

(……やはり断るべきであつた……)

大人(というよりお姉さん)Verのヴィヴィオと対峙しながらシノは内心毒づいた。

結局彼はあの後勝負を受けたのだ。早速後悔である。が、もう遅い。

スタートの合図は、今告げられたからである。

ルールは格闘オンリー三分一本先取。

両者は一步も動かない。

頭の中でシュミレーションを繰り返す。

唐突にヴィヴィオの表情が一瞬苦くなった。

シノの隙が見当たらなかった。

……… ゆらり、ゆらりと。シノがゆっくりと動き出していた。慌ててヴィヴィオも動く。

「……ヴィヴィオ、もう飲まれたね」

二人の対峙を見て、なのははポツリと呟いた。

「……僕もカラスマさんの初動が見えませんでした」

「じゃあ、ミクト君も飲まれた？」

「はい。完璧なぐらいに」

シノの歩き出しはヴィヴィオとミクトには見えなかった。

——否、見えていた筈。ただ、それを初動と見切れなかった。シノが動き、ヴィヴィオが遅れて動く。ペースはシノに主導権が渡ったと言っても過言ではない。

ミクトも今頃ヴィヴィオと同じ状況にあった筈だ。先手を取られて焦り、主導権を持っていかれる。

「…私もギリギリ見切ったか見切れなかったぐらいかな……」

二人を見ながらなのはまたポツリと呟いたのだった。

（——スゴい集中力だ……。隙が読めない……）

互いに距離を保ったまま、ヴィヴィオを率直な感想を抱いていた。スゴく強い。彼はまだ自分が行くことの出来ない領域の更の上を行っている。差は歴然。恐らく、どんな努力をしても。追い付くのは何十年先となるだろうか。

（——見習って、教わって。とにかくカラスマさんに追い付かなくちゃ）

追い付く見込みなど、僅か数パーセントに過ぎない。でも、追い付かなくては。追い付いて、スゴいと言わせない。言わば、目標だ。

「ハアアッ!!」

しかと地面を踏み締めて地を這うように低く、低く突っ込む。シノの足下直前から伸び上がるように右のアップー。

シノは左手で自分の右に逸らしながら左に軽くスライド。脚の力は抜くことなく、右のジャブを腹に。

ヴィヴィオは左手で弾き、逸らす。

シノの左のハイキック、右のロー。右手を畳んで受け、更に左足を畳んで受ける。

上半身がから空きになった。ヴィヴィオの左フックからジャブ、右の打ち落とし。

フックは打ち上げジャブは手のひらに受ける。打ち落としは胸板に受け、シノから大振りの右のストレートが飛ぶ。

左腕を畳む。咄嗟に右のカウンターを狙うがシノの左手が右手を弾きそれをさせない。

重い一撃が左腕に突き刺さる。ビリッと鋭い痛みが左腕を痺れさせる。

もう一度、右が飛んでくる。が、ストレートではない。速さを重視した軽く鋭いジャブ。

何故か、リーチが長い。

咄嗟に後ろに飛んで構え直す。

「ハアア……はあ……はあ……ッ……すううー……ふううー……」

たった数秒間の打ち合いだった。それだけで息は乱れ、軽く肩で息をする。

そんなヴィヴィオに対し、シノは開始前と全く変わらない。悠然とした構え。隙を絶対に見せない。

さっきのヴィヴィオの突貫は賭けに過ぎない。相手が出ないのであれば、こちらから。それで何か流れが少しでも変われば、と思ったのだが、賭けは全くのハズレ。見事に全部持ってかれた。賭けに勝ったシノは先程と殆どいる場所は変わっていない。勝機は今のところシノに傾いているようだ。

「こちらから行くぞ」

シノの言葉にヴィヴィオは身構える。

——刹那、いつの間にか距離をゼロに詰められていた。

「ッ……！」

反射的に腕をクロスした。そこへ拳が当てられる。

（いつの間に……！？）

距離を詰めようとしていたのはわかった。一歩目の踏み出しもきちんと見えた、筈なのに。一瞬気付くのが遅ければ間合いに入られていた。

左ジャブ、右ジャブ、右ストレート、左のローキック、繋げて右のハイキック、詰めは左のローリングソバット。

初撃と二撃目までは捌けた。が、それ以降は全て腕なり脚なりで受けてしまう。

身体中が悲鳴を上げ、ふらふらと後退する。

「……ふむ。主の腕、限界であろう？ 脚も重心移動も疎か。自分も下手に手を加えては怪我をさせかねるのである」

確かに。腕は両方ともビリビリと痺れて上げるのも辛く、脚も力が入らない。

どう考えても続行は難しい。五体満足でまだまだ余裕のシノには届かない訳だ。

「高町殿。高町ヴィヴィオも限界にある。ここで止めても良いであろうか？」

ヴィヴィオの目にはまだ闘志がある。が、それは気持ちだけ。体は休みを求めている筈だ。

「んー、確かにそうだね。ヴィヴィオ、休憩。カラスマ君もお相手ご苦労様」

なのはもヴィヴィオの身を案じてか、シノの意見に肯定した。これにはヴィヴィオも従うしか道はなく、素直に構えを解いた。

「礼には及ばぬよ。まだ二割も出していないのであるからな」

「ええ！？ カラスマさん二割ですか！？」

「なのであるか？ 試合中にあれだけ隙があつたのだぞ？ 本気で全力出すとなればここ一帯を更地にする自信がある」

「……、」「」

シノの言葉に一同啞然。更地＝何もない平らな土地だ。

「……む？ 勘違いするでない。砲撃魔法に近いものでなら出来るという話であるよ。何も拳一つで更地など誰も出来ないのであるよ」

寧ろ出来る時点でロストログアに指定されるのである、とシノは

深く頷く。「だ、だよねえ」となのはも冷や汗を流しながら相槌を打った。

「……でも、砲撃魔法に似たもの、って何ですか？」

そこでミクトが疑問を口にした。
砲撃魔法に似たもの。それ即ち“魔法”か“否”か。

「うむ。それは 氣 である」

氣？ と三人が首を傾げる。

シノは三人とはまた別のベンチに腰を下ろして話し始めた。

「まず 氣 の説明の前に少し前置きがあるのである」

人には命の源となる 生命エネルギー を持っている。魔力や 氣 はその 生命エネルギー を変換させたもののことを言い、魔導師全員が持つリンカーコアもこの 生命エネルギー によって突然変異で出来上がったものなのだ。

地球に住む人間が滅多にリンカーコアを持っていないのも、生命エネルギー がリンカーコアを創りだすコツを遺伝的に知らないからであって、だからこそ地球人がリンカーコアを持つのは珍しいのだ。

魔法使い——つまり、魔導師や魔術師はこの 生命エネルギー を“魔力”へ自動的に変換することによってようやく“魔法”という概念が使用出来るようになるのである。

氣 もその 生命エネルギー を変換させたものに過ぎず、
氣 は誰でも使えるのだ。

「——で、ある。が、だ。 氣 は使えてもマスターするには
十年以上の年月が必要なのである」

シノの場合、父の遺伝により偶然も重なって強いリンカーコアを
持つて生まれた。それに加えて母は地球で 氣 について学んでい
たらしいのだ。

父母共に優秀な人で、シノは全て彼らに学んできたのだとか。

「余り真似するものではあらぬよ。魔力と 氣 は似て非なるモノ。
それに加え 氣 は精神面に深く関わる。主らはもう遅いのである。
やるのであれば、片手で数えられる歳でなくては無理であるよ」

氣 は 生命エネルギー を精神力によって並々ならぬ力を発
揮する。

その土台を作るのは五歳までに終わらせなければ理論上不可能な
のだ。

「さて、ここまでは単なる前置きである」

曰く、 氣 は精神力。精神力によって強くも弱くもなる。
シノの 氣 の応用性は高い。身体強化から殲滅技。一対一から
一対多まで様々だ。

どこから現れたのか、子猫がシノの足下に来て擦り寄った。

「しかし、 氣 は応用が利く面、扱いが難しくデメリットなるも

のも多いのである」

子猫を一撫でし、抱き上げて膝に置いた。

「母の話を聞けば、氣の操作を誤って人を殺めた者や自ら自爆してしまった者もいたようである」

精神力が強くても、器を計り間違えて内側から破裂してしまう。そんな事故は数えきれない程見てきたと言っらしい。

三人の背筋が凍った。

子猫は雰囲気似合わずに喉を鳴らしながら気持ち良さそうに丸まっている。

「氣の土台作りに歳を重ねる程自滅の確率は多くなるのである。ボーダーラインは最高五歳が限度であるよ。無邪気な時ほど、土台は強くなるのである」

シノが右手を翳す、と、手の先に火が灯った。

「魔力変換資質と似たようなものでな。氣を炎になら変えられるのである」

「……確かに、火からは魔力が感じられないです。…ただ、生命力みたいなのが伝わってきます」

「うむ。ランウェルの言うことは最もである。これは魔力ではなく、氣を炎へと変換したもの。魔力と氣を比べると、氣の方が純粹な生命エネルギーに近いのであるからな」

手元の子猫はいつの間にか寝息を立てていた。

シノはフツと笑った後、子猫を近くのミクトに預けて立ち上がる。

「これで失礼するのである。高町ヴィヴィオ、更に精進。ランウェルはまた今度、主の得意な魔法でも見せてくれ。では、高町殿。またいつか」

軽く会釈をし、身を翻す。

「私のこと、ヴィヴィオで良いですよー！ シノさん！」

「僕も、ミクトでお願いします！」

「シノ君またね」

三人に見送られ、シノは練習場を出た。

「……ねえねえヴィヴィオ、シノ君どのくらい強かった？」

「僕も気になる」

「むむ…、でも多分、本気の全力全開でも勝てないなあ……」

「ヴィヴィオでもそんなに？　じゃあ僕は尚更無理だ……」

「でもミクト君魔法戦なら良い勝負出来るんじゃないかな？　ミクト君程の魔法技能の持ち主はいないよ。ね、ヴィヴィオ」

「うん！　ヴィヴィオもそう思うし魔法戦ミクト君には一回も勝ってないもん」

「アハハ、恥ずかしいよ……。なのはさんはどうですか？」

「そうだねえ。魔法と空中戦だけなら勝てるかもしれないけど、総合したら負けるかも」

「……改めて思うけどシノ先輩ってヤバいんだね」

「ホント、そうだね……」

3 Investigation (後書き)

またミクト君軽く空気だよ……

肉弾戦じゃミクト君そこまで強くないからね……
とゆるかシノマジチートwww

でも自分こういうのしか書けないんで……。

さて、今回から次回予告やりまーす。
エンジェルビーツ
ABをイメージして下さい。

* * * *

「ふむ。やはり、な」

「貴方に伺いたいことと、確かめたいことが」

「ストラトスと似ておるなあ、主」

「ッ！ 何故ここに……？！」

「一つ、手合わせ願うのである」

「……少し、本気と行くのである」

『4 Spirit』

4 / Spirit

シノ・カラスマの視線の先。とある一人の男が歩いている。先程練習場で見付けた人物だ。

恐らくだが、“霸王”と接触するだろうと予測した結果尾行しているのだ。

出来うる限り自らの気配を殺して五十メートル後ろから常に視界に入れている

（……奴も望んでいるのであるか……）

男は立ち止まって上を仰ぐ。シノも歩みを止めて壁に寄りかかった。

前にいる男からは、少し興奮の様子が見て取れる。

大方連続傷害事件の犯人と接触したいという目論みだろう。

（自惚れに見える）

片目を閉じて更に集中。体内の 氣 の流れを見ても、彼はかなり落ち着きがない。

氣 は誰にでも使えて、限られた者にしか使えない。人間の体内は 氣 が循環しているのだ。

シノ・カラスマは 氣 の大達人だ。 氣 の流れなど手に取るようにわかる。

目の前の男は弱くない。だが、明らかに強くない。

例えば。いくら筋力を着けて世界一力持ちになっても。山の斜面を転がってくる岩を止めるのには恐怖心を捨てる必要があり。

例えば。冒険者がいくらレベルを上げて強くなろうと。魔王に挑むには勇気がいる。

男には“精神力”が足りない。

「少々お時間よろしいでしょうか？」

ふと、男の目の前に一人の女性が現れた。

——アタリだ。

シノは自らの口元に笑みが浮かんだのを感じた。すぐに冷静さを取り戻して 氣 を乱さないよう調整する。

やはり、自分も格闘家であつたか。

自嘲気味にフツと笑った後、シノは男と女性に視線を戻した。

「……オマエが、“霸王”か……」
「はい」

男はなるべく平静を装って尋ねる。

「ふむ。やはり、な」

予測通り。名のある格闘家を倒したのは頷ける。魔力から雰囲気。無意識の中の 氣 流れも規則良い。

「貴方に伺いたいことと、確かめたいことが。」

一つ。貴方は“王”について何か詳しいことは知りませんか？」

「知らねえよ。んなものに興味はねえ」

「そうでしたか。ではもう一つ。貴方と私。どちらが強いでしょうか？」

「そりゃあ、やってみなきゃわからんだろう？」

そう言っ て男は構えた。

「では――」

刹那、“霸王”の姿がブレ、

ドゴンッ！

拳が男に叩き困れていた。

「……ほう、よく防いだのであるな」

男は咄嗟に腕をクロスしていたようで拳をなんとか防いでいたようだ。

「グウッ……隙アリ、だ！」

瞬間、男は一步引き、渾身の右ストレートを。

「――残念ながら、“霸王”に主の見切れる隙などあらぬよ。そうであるっ？」

——“霸王”よ。

ガッ、と。男の拳は“霸王”に片手で押さえ付けられた。

「……………えっ……………？」

押しても引いても動かない。

「霸王——、」

グッと右の拳を握り、

「断空拳——！！」

男のと真ん中へと叩き込んだ。

「ア……………ガッ……………！？」

男はそのまま白目を向き気絶。

「——面白い……………！！！！」

——ざわっ……………！！！！

シノから大量の 氣 が爆発するように溢れだす。

「！！？」

その気配に“霸王”が驚いたように顔を上げた。

それはそうだ。さっきまで全く気配など無かったのに、まるで瞬間移動したようにそこに現れたのだから。

「ストラトスと似ておるなあ、主」

闇の影からゆらりと現れたシノ。

「ッ！ 何故ここに……！？」

その姿を見て“霸王”は後退る。

「何、驚くことなかるう？ 自分は最初からここにいたのであるぞ？」

一歩踏み出す。それだけで空気の重みが増す。

プレッシャーが重圧となって体にしなだれかかる。

「碧銀の髪……どこかで見た、気がするのである……。やはり……、ストラトスに似てるのである」

ピクッと“霸王”は言葉に反応する。

「……しかし、今はそんなことどうなるうと構うことはない」

腰を落とし、神経をグッと集中させる。刹那、シノの周りを氣が吹き荒れて熱さが増した。

「——一つ、手合わせ願うのである」

今までは“霸王”の登場を楽しんでいたかのような雰囲気だったのがガラリと変わる。

顔付きは完全に格闘家。中等科一年生の面影は完全に消えていた。

「……今までのこと、全て見ていたと？」

“霸王”も退くことを諦めたのか。警戒を解くことなく口を開く。

「うむ。しかし、残念ながらあの質問のどちらの答えも不明である」「そうでしたか。……では、」

“霸王”も構えた。

男の時は全く構えようとしなかった“霸王”が。

「行くぞ」

「はい」

——刹那、“霸王”と最強の挑戦者が衝突し、空気を震わせた。

「何い？ “霸王”が現れた？」
「はい。何やら接触したらしき男性から連絡が」
「そう、か……早めに隊員を向かわせろ」
「了解しました」

*
*
*
*
*

——ガッ、ゴッ…ビュウッ…ゴン！

拳と拳がぶつかり合い、空気が破裂する。一般人にも見えない速さの往復。見えるのは溜めの一瞬のみ。

「……主、拳のみ、か？」

一際殴り合って退いた時、シノが確かめるように口を開いた。まだまだ余裕のようだ。

「蹴り、ですか……」

「答えぬのであれば言わずとも良いのである。主が使っまで使わん」

ジリツと地面に脚を擦り付けて力を込めた——、

——のは、“霸王”のみだった。

「……主、何を笑っておる？」

ゆらり、ゆらり。闇を進む番人のように。シノはいつの間にか気絶していた筈の男に歩み寄っていた。

「あゝあゝ、？　んな、“霸王”なんてよお…襲撃犯じゃ、ねえか……逮捕されて何が悪いんだよ！」

男の表情は不機嫌に染まっていた。

「……ふむ。つまり、負けて悔しいから捕まってしまえ、ということであるか？」

「ハッ！ 犯人いんのに通報しねえバカがいるかってんだ……」

「——貴様が最も大馬鹿である」

呆れた。そう言わんばかりの口調でシノは言った。

「負けた。悔しい。妬ましい。勝つなんて生意気だ。丁度良い。犯人なら捕まってしまえ。」

——自惚れるのもいい加減にしろ！！！！」

大音量の音が空気を大きく揺らした。思わず耳を塞ぎたきなるような程の声だ。

男の胸ぐらを掴み、シノはぐいと持ち上げた。

「そのような人を外れた行動を取る者を“外道”と呼ぶのである」

さっきの怒りとは違う、静かな怒り。ギラリと光る紅い眼光の奥から滲み出る“ナニカ”に男は震え上がった。

[illegible]

拳と拳のみ。他は何も無い。ただ殴り合うだけ。

何合、何十合、何百合。ひたすらにぶつかり合う。例え拳が悲鳴を上げようと。それだけでは止める理由にはならない。

とにかく必死で。今出せる全力で。リミットギリギリまで。

遠くから、喧騒が聞こえ始めた頃。

二人は何も語らずに距離を取った後に頷いて虚空に消えた。

後には気絶した男のみが見つかり、証言を取ろうとしたがその時の記憶は無かったそうなの。

* * * *

翌日朝。

「ストラトスか。おはようである」

「おっ、おはようございます……」

偶々だろうか。シノは生徒は疎か教師も疎らな時間帯に教室に来ており、アインハルトもシノと対して変わらない時間に登校した。

「珍しいのであるな。ストラトスがこんな時間に登校とは」

「た、偶々です。……その、私のことはアインハルトで構いませんので……」

「良いのであるか？」

「は……はい……。その方が何か、良い気がしまして……」

「うむ。ではそうさせてもらうのである。……ところで早速だがアインハルトよ」

「はひッ！」

「……何かあったのであるか……？」

「いっいえ！ なんでも、なんでもない、ですから……」

「そう落ち込まれて言われても説得力など皆無であろうに……。まあ良い。ところで、その拳の包帯はどうしたのであるか？」

「……」

「……、」

「……」

「……、」

「……ノーコメントで、よろしいでしょ

うか……？」

「……構わぬよ……」

4 Spirit (後書き)

だからチートチート言っちゃアカンで。

……しかし、おかしいな……。ミクト君主人公の予定だったのに……。

ヤヴァイね。

出演回数的にこりゃメインシノ君に横取りだよwww

では、感想等よろしくお願いします！

←←次回予告←←

* * *

「こんにちは、シノ先輩」

「うむ、ご機嫌ようである」

「リオ、コロナ、で良いのであるか？」

「「よろしく願います！」」

「明日練習どうですか？ 皆も行くんですけど」

「うむ。軽く顔を出すのも面白かるう」

「また僕見学かぁ……」

「シノ・カラスマである」

「ノーヴェだ。あと、」

「ウェンディっスよ」

「うわぁ、シノ先輩有名だね……」

「何？ ヴィヴィオとノーヴェ殿の見学であるか？」

「おお、やっぱり二人は違うね！」

「皆は良いよねえ……」

「ミクト君、元気出しなよ」

「……うむ……。技を見せるだけなら良いのであるが……、試合はお断りであるよ」

「氣の極意？ 知りたいのであれば家に来れば良いのである」

「お前が噂の通り魔か？」

「否定はいたしません」

「昨日ぶりであるな、“霸王”よ」

『5 / Strike Arts』

EX'Original Character Introduction

参考程度に

EX / Original Character Introduction

姓名：シノ・カラスマ

漢字：鴉魔 紫乃

身長：172cm

体重：57kg

年齢：13歳

誕生日：4月3日

出身：ミッドチルダ首都クラナガン

血液型：O型

魔力光：紅

魔力ランク：A+

魔力値：1140000

使用魔法：近代ベルカ式

所持デバイス：特になし

容姿：黒髪紅眼。普通よりはがっしりした体格。目付きは少々鋭い。

備考：←←←←←

「」である」という独特な口調で喋る物静かな少年。とても13歳には見えない。迫力がスゴいと周りには語る。格闘技は“ストライクアーツ”を少々。あくまで“少々”（本人談）。他に様々な格闘技をマスターしている為、総合格闘技試合となればトップになれる力・技術・心を持ち合わせている。デバイスは無く、魔法もあまり使わない。資質はそこそこあるがあまり上手くはない（本人談）。

父母は二人共地球出身。父は管理局員、母は 氣 専門の格闘家。母から 氣 についてを受け継ぎ日々精進している。

魔法より 氣 の扱いに長けており、そんじよそこらの魔導師であれば指一本で充分。恐らく管理局のエースにも勝てると思われる。意外に優しく、年下の面倒を見るのは嫌でないらしい。

年上には敬語は使わない。ただし、名前の後にならず「殿」と付ける。

成績はかなりよく学年次席。

姓名：ミクト・ランウエル

身長：？cm（ヴィヴィオより僅かに小さい）

体重：不明

年齢：9歳

誕生日：1月6日

出身：ミッドチルダ首都クラナガン

血液型：AB型

魔力光：新緑・若葉色

魔力ランク：S+

魔力値：2160000

使用魔法：ミッド式

所持デバイス：クラッツ（インテリジェントデバイス）兄貴肌なデバイス。待機状態は深緑色の水晶体。

近距離型と中距離型と遠距離型に変形する。
トンファー ハンドガン マテリアルライフ

トンファーは両腕に。ハンドガンの時は2丁に出来

る。

変形指示は近距離が クロス 。 中距離が ミドル
。 遠距離が ロング 。 2丁にするには中距離時に ダブル と
いう。

全てのタイプが深緑を基調としたデザインになっ
て^{ベース}
いる。

容姿：新緑・若葉色の長髪をうなじで白いリボンで束ねている。瞳
は黄金色。 中性的な顔立ち。

備考：←←←←←

精神年齢幼めな少年。 周りに女子がいるのでよく女子と間違われる。
つまり男の娘。 一人称は「僕」。 明るい性格で友達が多い（保護さ
れるかたちで（笑））↑本人自覚ナシ。 ヴィヴィオグループと常に
一緒。 成績はグループ内二位。

格闘技はヴィヴィオ達には全くだが、トンファーを使った戦闘は互
角に。 魔法技術がとにかく異常。 消費は激しいが元々の魔力量が2
00万超えなのであまり問題はない。 魔法技術だけならエース級。
今のところ学校内で彼の右に出るものはいない。

5 / Strike Arts

「あッ、シノさん！ こんにちは！」

「こんにちは、シノ先輩」

「うむ。ご機嫌ようである」

また顔を会わせた初等科四年四人と中等科一年一人。偶々出会ったにしては接触率が高い。まあそれは置いておき……。

「……えと、初めまして……じゃおかしいですか……？」

「ご機嫌よう、で良いのであるまいか？」

何回も顔を合わせてはいたのに初めましては少し違和感がある。

今回は初顔合わせでも無いが偶々会ったので自己紹介だ。

ツインテールでお嬢様な清楚オーラを出すのがコロナ・ティミル。頭のリボンにショートカット、八重歯がよく似合うリオ・ウエズリー。

「先輩、良くファミリーネームで呼ぶみたいですけど、名前で呼んでもらって大丈夫ですよ」

ニヤヒヒ、とやはり八重歯を見せて笑うリオ。シノは「ふむ……」と数瞬思考した後、

「リオ、コロナ、で良いのであるか？」

と言った。

「はいっ」

「オーケーです！」

バッチグーとサムズアップ。シノもまあ良いか、と小さく苦笑するのだった。

「「よろしくお願いします！」」

「うむ。よろしく頼むのである」

この後また「そう言えば先輩独特な口調な」のくだりに移ったのだが、描写も面倒だしわかっていると思うので割愛とする。

「……確かに、先輩その口調じゃなかったらコンプレックス皆無ですもんね」

「リオよ。そういう本音は本人の前で言うものではあるまいのよ。意外と傷付くのである……」

「先輩もストライクアーツ出来るんですかッ？」

「軽くであるよ。レベル的に言えばエクササイズ卒業程度しか出来ぬ」

肩を竦め「やれやれ、である」と苦笑する。

「その割にはシノさん滅茶苦茶強いじゃないですか」

少しムスツとした表情でヴィヴィオが言う。その横では「まあまあ」とミクトが苦笑しながら慰めていた。

「あくまで総合的に見れば、の話である。ストライクアーツに限れば初心者同等である。下手すれば敗北もあり得るのであるよ」

流石に負けるのは嫌だ、と言う。

四人は思った。

（（（この人ストライクアーツだけでも普通に強いと思う……）））

と。雰囲気からして負けたビジョンを全く想像出来ないのだ。

「……っと。ヴィヴィオよ。こうして呼び止めたのも、何か意味が

あつてのことであろう?。」

そう言えば、と思い付いたようにシノは口を開く。

彼は普段からあまり喋るような人ではない為、友人も多いとは言いきれない。そのお陰か、話しかけてくるのは大抵相手が話題を持つてくる時のみとなり、特に会話をしない場合は挨拶もしないのだ。そのクセか。相手に話題を求めた。

「あ、はい。ストライクアーツ絡みのことで……」

ストライクアーツとはざっくり説明すれば近代スポーツのよ
うなものである。

「明日練習どうですか? 皆も行くんですけど……」

つまり明日、ストライクアーツの練習がある。だから一緒に
もらえないか、というお誘いである。

「ふむ……。その“皆”という括りはこの四人グループで良いので
あるか?」

「あとは他に、私のストライクアーツの先生も来ます!」

ヴィヴィオの“先生”というフレーズにまたシノは反応する。

ヴィヴィオの先生〃ストライクアーツの先生〃強い〃有名〃傷害
事件の被害者になりかねない〃“霸王”に会える確率UP!

以上が一秒未満の時間内にシノの脳内にて導きだされた等式であ
る。

「……うむ。軽く顔を出すのも面白かるう。同行させてもらうのである」

彼の心の比率を “ 霸王 ” 関連：ストライクアーツ関連：美少女達との出掛け で表すと 8：1：1 だ。思春期なんだから少しくらい下心を持ってほしいものである。読者のためにも。

果たしてそれは叶わぬ夢のまま終わるのだろうか。

「……地の文が終わりかけているのである。何か話題を」

「い、いきなりですね」

「でないと中途半端過ぎるのである」

「ごもつともです。」

無理矢理話題を転換させるとしましょう。

「して、集合は何時になるのであるか？」

「午後三時くらいで良いですか？ 午前とその後少し用があるので」

「うむ。了解したのである」

その日は軽く予定を合わせた後、ちょっとした雑談をして解散となった。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

翌日であります。

「……ふむ。予想外を見越して早め出たは良いのであるが…、早く着きすぎたのである」

シノは中央市街のベンチでポツリと呟く。

時間は二時三十分。約束の時間まであと三十分ある。

現在のシノの格好はジーンズに黄色のベースに黒のラインの入ったスニーカー、白に紅い十字架が斜めにプリントされたＴシャツ、その上には長袖グレーのフード付きのパーカーを袖は通さず肩にかけるようにしていた。

シノは何気にルックスも良い部類なので、周りを歩く人（特に女性から）「カッコいい！」や「モデルさんかな？」などと囁かれている。

無論、そのような職業についている訳ではないと言いたいのだが、知らせる義理も何もあったもんじやないので放置プレイを実行した

のである。

「……何か暇潰しになるようなものは無いのであるか……？」

一瞬しばらく周りの店を訪れてみるという考えもあったが、この辺の地理は全く知識として頭の中に入れてきてない為諦めた。

「……む、そう言えば……」

と、何か思い出したようにシノは胸ポケットから携帯端末を取り出して起動した。

適当に中身の機能を見ていくと、中にオンラインゲームが一つあった。

「………ペッパーストーリー？ 地球のアレに酷似しているのである……」

記憶を手繰ると、数年前にやることなくて少しやり込んでいたというビジョンが浮かんだ。

それなら、と久しぶりに起動してみることに。

懐かしいテロップだ。画面はいくらかアップデートされたのか、エフェクトがかなりかわっている。

「うむ。本当に久々であるな」

このゲームは至って簡単。フィールド上に出てくるモンスターを倒して進んで行くゲームだ。

ソロでやるもよし。パーティーを組んでダンジョンをクリアして行くもよし。

あの時はイマイチストーリーの方向性が見えなくて止めたが久々にやってみると少し興味が湧いた。

「おお！」

と、いきなり近くのベンチに座っていた青年グループが沸いた。

「見るよこのアバター！ “カラス”だぜ！」

「マジかよ、何年ぶりだ……？」

「スゲー。ついてこうぜ」

どうやら彼らも『ペッパーストーリー』をしていたようだ。

『ペッパーストーリー』は一人一人がアバターを作って遊ぶオンラインゲームでその普及率はミッドチルダ全域で常に一位を取り続けるゲームだ。

確かに近くに他のプレイヤーがいても可笑しくはない。

「……なんであるか、この量は……」

シノのプレイ画面をしてみる。

そこは他プレイヤーで埋め尽くされ、シノ自身のアバターすら見えなくなりそうな状態だった。数は目測で三百人は下らない。

『英雄キターーーー（。。。）ーーーー！！』

『ひと多いwww』

『カラスさん』

『カラスたんハアハア……www』

『888888888888』

『見えん』

アバターが次々に吹き出しに文字をうつて行く。画面は既に滅茶苦茶だ。

「カラス」……自分のこと、であるか……？」

因みに先程から見知らぬアバター達の言う話題は殆ど全員が“カラス”というプレイヤーについてだ。

しかも、“カラス”というプレイヤー名は現在シノが使っている。このゲームの場合、名前の重複は有り得ない為、“カラス”のアバターを使えるのはシノのみだ。

「……酷くなる前に出るのが得策であろう……」

シノは躊躇うことなく『ペッパーストーリー』をシャットダウン。ついでに携帯端末からアンインストールしておく。何故かこれ以上は控えると本能が告げるのだ。

「シノさん、こんにちは」

ふと、目の前から声をかけられた。昨日聞いたことのある声だ。

「コロナであつたか」

「ご機嫌ようである、と言ってシノはベンチの席を空けた。アンインストールも丁度終了したところだ。

「シノさんは何かやっていらしたんですか？」

空いたベンチに腰を掛けたコロナ。シノが携帯端末で何をしてい

たのか気になるご様子。

「ただの暇潰しであるよ。つまらぬモノであるが故、止めたところである」

つまらない、というよりは、大事に巻き込まれたかねない、と言った方が正しい。が、この際どうでも良い。

「先輩！ それにコロナも！」

「こんにちは」

しばらくしてリオとミクトも一緒に到着。どうやら来る途中で偶々出会ったらしい。

「先輩、トウウィッター見ました？」

そう言えば、とリオがいきなり目を爛々と輝かせて聞いてくる。

「……おお、あの眩く云々のやつであるか？ 見てはいないのである」

一瞬たじろいたシノではあったが取り敢えずNOと答えておく。

因みにリオの言う“トウウィッター”とは一言眩く例のアレである。

「あの『ペッパーストーリー』に“カラス”さんが現れたみたいなんですよッ！」

「「ええッ、そうなの?!」「」

シノ、ではなくミクトとコロナの方が驚いていた。しかし、シノの場合は微妙な表情で何と声をかければ良いのか迷っていた。

「見たかったなあ」

そう呟くりオの横。当の本人たるシノは魔法カード『黙秘権』を発動！ このカードが発動した時、プレイヤーの指定した時間までずっと黙り続けることが出来る！

まあそんなことはつきり言っただうでも良い。

「皆ー！ おまたせー！」

シノが内心軽く焦りつつ早二十分が過ぎた。

ヴィヴィオが手を振りながらててーと駆けて来る。その後ろには何やら付き添いの人物らしき人が二人。どちらかがヴィヴィオのストライクアーツの先生であろう、とシノは予測する。

「こんにちは」

「こんにちはです」

ミクトとコロナは知り合いなのか、それらしい態度でご挨拶。後の二人と初対面であるのはシノとリオだけらしい。

「シノさんとリオは初対面ですね？」

ヴィヴィオの問いに二人は「うむ」「うん」と頷く。

「はじめまして、リオ・ウェズリーです！」

「鴉魔 紫乃、改め、シノ・カラスマである」

「ああ。ノーヴェ・ナカジマと、」
「その妹のウエンディっス」

妹：髪は異常なくらい別色であるな、と喉まで言葉が出かかるが無理矢理押し込んで咳払い。

ちよつとこちらを見る目がイタイがシノはそんなものを気にする人ではない。

「ウエンディさんはヴィヴィオのお友達で、ノーヴェさんは私達の先生！」

コロナが補足説明してくれる。

その後ろでは「よ、お師匠様！」とウエンディが囁し立て、「先生じゃないっつーの！」と照れながら否定するノーヴェの姿が。

「元気であるなあ……」

「そうですねえ……」

男二人はその様子を蚊帳の外からのんびり苦笑しつつ見守っていた。

* * * *

「……そう言えばシノ、お前のそのくちよ

（割愛します）

——って待てオイ！」

「待つても何もこのやり取りは既に何回もやったのであるよノーヴェ
殿」

「あたしはまだ聞いてないぞ！ オイ作者^{キノン}！」

「あのう、ノーヴェさん？ この場面会話だけで通すみたいですよ
……」

「はあッ!？」

「うむ。台本にもそう書いてあるぞ」

「待て待て待て一旦次の場面行くぞ！ メタ発言が多い！」

「割愛上等、という訳であるな。ウェンディ殿もよろしいであるか
？」

「了解ッス」

*
*
*
*
*

..... (↑ノーヴェが怖くて今まで隠れてた)
。

さて、場所はストライクアーツの練習場^{トレーニングスペース}がある公民館に移動する。

「確かにシノツチはその口調じゃないと何も残んないっすよねえ」
「二回目.....orz」

.....シノのキャラ崩れが本格的に起こる前に次へ行きます。

「あッ、カラスマ先輩！」

「よお！ 久しぶりだなあ、カラスマ！」

「カラスマ、久しぶりー！」

シノが一步踏み入れると、気付いた人皆が声をかけたり話をしたりと一気に騒がしくなった。

「うわあ、シノ先輩有名だね……」

「……アイツ真面目に何者だよ……」

ミクトは驚愕の表情。ノーヴェは本格的に混乱していた。ヴィヴィオからシノの実力を聞いたが、計り知れないらしい。全力・本気を出さなくてもその人の力の底はある程度見えてくるのだが、シノの場合はまるで何千光年もの先の六等星を安物の手作り天文台で見ようとするのと同じくらいのこと。つまり、底が見えない。

「お！ シノじゃんか！ 今日は何だ、模擬戦か？」

その中で、シノと同じくらいの背の少年（というよりは大人）が話しかけて来た。肌は黒くて体格的にはその男の方がどうも一回り大きく見える。

「サルファティアであつたか。いや、今回はせぬよ。トレーニングのみにしよう」と模索中である」

「そかー。ま、また相手してくれや」

「相も変わらず皆に恥体を見せるのが好きであるとは……。そろそろ絶交を考え始めるべきであろうか……？」

「アホか！ オメエが強過ぎんだろ！ 次こそは勝ってやつからな！」

「敗北すれば奢りであるぞ？ 上限額ナシである」

「上等！ その首洗って待ってる！」

「期待せずに待つとするのである」

サルファティアと呼ばれた男はズンズンと歩き去った。

「シノツチ、シノツチ。知り合いっスか？」

「うむ。時折奢りをかけて試合をするのであるよ。全線全勝であるが」

サルファティアという男。この辺りでは上位トップに立てる実力者であるが、やはりシノには勝てないらしい。

やはりチート……なんでもない。

少女らは粗方着替えて各々練習。ミクトとウェンディは見学。シノはトレーニングへ。

「……ノーヴェ」

「？ なんだ？」

「……シノツチが理解できないっス……」

「落ち着け、大丈夫だ。あたしにもアイツが百キロ近いモン片手で余裕で持つてんのは見えてるから」

「良かったあ、仲間がいたっス」

二人の見る先。シノがバーベルを使っているのだが……、何故か片手に一本を持って計二本を涼しい顔で使っていた。チート道まっ

しぐらである。

「さて、ボチボチやるかな」

ぐるぐると肩を回しながらノーヴェは立ち上がってヴィヴィオの元へ。

「あ、またヴィヴィオとかな？」

近くにいたミクトはそれを見てまた別の人物の所へ。

「シノ先輩」

バーベル二個を担いでスクワットをするシノの元に行く。もうツッコミは入れない。した時点で負けだし、何より追い付く気がしないからだ。

「ヴィヴィオとノーヴェさんがやるみたいなんですけど」

「何？ ヴィヴィオとノーヴェ殿の見学であるか？」

バーベルを下ろしながら尋ねるシノは汗どころか息も上がっていない。

「取り敢えず、見ないかと思って声かけたんですけど……」

「うむ、わざわざすまないのである。行くでしょう」

バーベルを脇に置き、さして疲れた様子もなく先を歩くミクトの背中を追う。

しばらく歩くと人集り。その中心では既にヴィヴィオ大人モードとノーヴェが打ち合っていた。熟練者である証か、周りからは感嘆の声ばかりが溢れる。

「うむ、良い動きである」

ヴィヴィオの右ハイキックをノーヴェは左腕のガードで受け、右拳を突き出す。

「——左で受け右、である」

その直前。ポツリとしたシノの呟きがミクトの耳に入った。予測、だろうか。

「——あ……」

それは、誠に正しかった。
ノーヴェの一撃を左腕で受けたヴィヴィオは技後硬直の瞬間を狙い澄ましたように右で打ったのだ。

チラッとシノを見る。

眼は確かにヴィヴィオとノーヴェの二人に向けられている。がしかし、見ている箇所は他人とは大きく異なる。

他人が打ち合い全般を大きく眺めるのに対し、シノは拳・蹴の軌道や体重移動、予測まで全てを実際に己があの場合に存在しているのをイメージしていた。

イメージの中で、“相手”は自分のハイキックを上手く受けて力ウンター気味の右フック。シノはそれを見てから反応して左腕で受けた。

ヴィヴィオは経験から来る条件反射で受けたのだろう。

シノは否、その目で確かめてからイメージの中で受けていた。

「おお、二人はやっぱり違うね！」

「皆は良いよねえ……、あんなに上手くってさ……」

「ミクト君、元気出しなよ」

二人の打ち合いを見て、

リオは瞳を爛々と輝かせ。

ミクトは二人の技量に舌を巻いて落ち込み。

コロナは苦笑しながら慰めた。

ブンツと拳が唸りを上げ、バシィッと互いの一撃がぶつかり、
相殺する。

「二人ともやるモンっスなあ！」

今まで後ろにいたウェンディも拳を握り、興奮した様子で二人を
見守るのだった。

「こんなモンか」

「ノーヴェ、ありがとう！」

一通り終わったヴィヴィオ、ノーヴェはタオルで汗を拭きながら
四人の元へと戻ってきた。

「……あれ？ シノさんは？」

そこにシノの姿は無い。気付いたヴィヴィオが四人に聞くが、全員首を横に振るだけ。

「何言つてんだ、ソイツならそこにいるだろ」

「……え？」「……」

しかし、ノーヴェのみがその存在が見えていたようで、五人の横を指差す。

しかし、そこには誰もいない……はずなのに、シノ・カラスマがいた。

「……」

……、……

一同、啞然。

唯一見つけていたノーヴェも頬を引きつらせていた。

「うむ。やはりわかっていたのであるか」

苦笑。

五人はようやくはつきり見え始めた彼の姿を臆気ながら見れるようになる。

少し意識をズラせば見失ってしまいそうなくらい。それ位にまでシノの気配は無に近かった。

「……やはり、空間の形で気付いたのであるか？」

「まあ、偶々、かな……」

本当に、偶々だ。

ミクト達の隣の“空間”の気配が異常なくらいに無さすぎて気付いたのだ。そう、気配が無さすぎて。

何故そんなことをしたのか。

彼の場合、こちら辺ではかなり有名故にさっきから格闘戦の申し出が相次いでいた。

「……うむ……。技を見せるだけなら良いのであるが…、試合はお断りであるよ」

と、毎度毎度やんわり断ってはいたものの、何回も何回もで面倒になったので気配を完全完璧に消して人目を避けていた訳で。

しかし、その“完全完璧”が仇になっていたらしい。

「……ノーヴェ殿、口外は禁止であるぞ？」
「…了解了解」

* * * *

「氣？」

帰り際。練習場を出て間もない所。
改めてシノに問い詰めていたノーヴェが声を上げる。

「氣。即ち、“魔力”と似て非なる“力”。まず常人に扱える代物ではないのである」

あくまで達人のみが完璧に操れるモノである、とシノは語る。

「それじゃ、シノッチは氣の達人な訳？」

「まだまだ、ひよっ子であるよ。達人……否、大達人は母である」

全く叶わぬ相手であるよ、と付け足す。

ノーヴェはいくらなんでも嘘だろ、と疑った。ヴィヴィオから聞いたが、シノは彼女を二割の力も出さずに圧倒したではないか。

本気ですら計り知れない奴が、「更に上がいる」なんて言えば絶対必須である。

「……無論、氣だけで見ればである。ルールに縛られ無くば、勝機は八割ほどである」

八割もある勝機。しかし、言い換えれば勝機は八割しかない。残り二割。大方、少しのミスを突かれれば負け、ということだろう。

「……因みに、その母と闘って何回勝った？」

ノーヴェの問いにふむ、とシノは数瞬思考してから口を開いた。

「5943戦中、5419勝401敗123分である」

「う、5000?! つつかほぼ6000じゃんか!？」

何を宣^{のたま}つかと思えば、たった13年間の間にほぼ6000回母と闘ってたった400敗程度しかしていないという驚異的な数字。

1〜3歳まではいくら戦闘は無理でも10年間で6000回はスゴい。一日約2回は闘わないとこんな数字は出ない。

恐らくだが、やるからには全力でやるだろう。それをほぼ毎日。いくらなんでも異常だ。

「……でもお前を400回も負かすって……」

「幼き時のことであるよ。現在では全戦全勝である」

それでも、とノーヴェは思う。シノのことだ、小さい時でも恐らくプロ以上の実力者だったのだろう。その相手から一本取るのがどれだけ大変なことが。

——一度、闘ってみたい。

不覚にも、そう思ってしまった。

「その 氣 も面白そうっスねえ。まだあるっスか？」

「 氣 の極意? 知りたいのであれば家に来れば良いのである」

「お! じゃあいつかオーケーっスかッ?」

「了解である、ウエンディ殿」

「おいッ、勝手な話進めるなってーの! お前一人じゃ心配だからあたしも行く!」

「もしかして、もしかしなくても妬いてるんスか?」

——ガコンッ!

ウエンディの脳天にノーヴェの拳骨が一つ。してはいけないよう

な音がした筈だが、被害者のウエンディは頭を抑えて涙目で蹲るだけだった。

「ウエンディ殿、大丈夫であるか？」

「うわ〜ん、ノーヴェがいじめるっスう〜！ あたしの味方はシノツチだけっス〜！」

「元気なら問題ナシであるな。ところでウエンディ殿。人に、それも異性に抱き付くのは人目を考えてほしいのである」

どうせ遊び半分。そうやってシノに絡んでくるウエンディ。

抱き付くウエンディの脳天の、また同じ場所へ。更に力の籠もった拳骨が落ちたのだった。

「チビ達送っててくれ」

「うう……それが人に頼む態度っスかあ……？」

「じゃ、またな」

「……お疲れ様でしたー！！」「……」

「無視しないでほしいっス」

「では、自分もこれで」

「シノツチまでえ」

よよよ……とウエンディが泣き崩れるがミクトら初等科、Sとシノはシカト。

ではまた、や、さようなら、といった挨拶を交わす。

「ほれ、ウエンディ殿」

と、うじうじしていたウエンディに差し出された手。
シノだ。

「初等科、Sがお待ちであるぞ」

フツと小さく笑う。

「シノツチ」

その手を取り、立ち上がったウェンディはシノへと飛び込み、

「……残念ながらそのような展開にはならないのである」

シノはそれをあつさり回避。

その直後に姿をあつという間に消された。

「いけずう」

がつくりと肩を落としたウェンディ。

仕方ない、と割り切り、初等科、S四人のあとに続いた。

* * * *

夜道を一人。ノーヴェは特に警戒する訳もなく（それでも夜道故に少しは警戒していたりする）歩道を武装隊基地へ向けて歩いてい

た。

「ストライクアーツ有段者、ノーヴェ・ナカジマさんとお見受けします」

そんな中、頭上から静とした清らかな声が響く。

場所は電灯の上。そこに碧銀色の髪をした女性が立っていた。目にはバイザー。纏う雰囲気もただの格闘家とは全く別のモノだ。

「質問すんならバイザー外して名を名乗れ」
「失礼しました」

スツとバイザーを外す。
その瞳は紫と碧の虹彩異色。

「カイザーアーツ正統。ハイディ・E・S・イングヴァルト。 覇王 を名乗らせて頂いています」

電灯から飛び降りるハイディ。

「お前が噂の通り魔か？」
「否定はしません」

タンツと柔らかく地面に着地。構えることなく、自然体に。

「お伺いしたいのは、貴方の知己である 王 達についてです。 聖王オリヴィエの複製体クローンと、冥府の炎王イクスヴェリア」

霸王 のその言葉に、しかし、ノーヴェは齒軋りして睨み付けた。

「貴方はその両方の所在をご存知であると……」

「——知らねえな」

キツパリと。淀み無く言い放つ。

「……聖王^{クローン}の複製体だの冥王陛下だのなんて連中と知り合いになった覚えはちつとも無え」

そう。それが現実だったとしても、彼女達——ヴィヴィオ達は、
「あたしが知ってんのは、今を一生懸命生きてる普通の子供達だ！
！」

王 ではない。
その身体が 聖王 の映し身であらうと。いくら彼女が 聖王 に似ていようと。

泣いて、笑って、怒って、悲しんで。
現在^{いま}を精一杯、力一杯、一生懸命に生きて、生き抜き続ける少女であるのだ。

「——理解しました」

その思いは果たして、 覇王 には届いたのだろうか。

「それについては他を当たるとします」

「ああ、そうかよ」

ノーヴェは警戒は解かず——寧ろ更に警戒心を上げていた。

かつての王達。それは、今に……、否、現代^{いま}に受け継がれている。

それが狙われているとしたら。

——守らねばならない。

「ではもう一つ、確かめたいことが」

臨戦態勢。ノーヴェは足を引いて広いスタンスで構える。

「貴方の拳と私の拳。どちらが強いのか、です」

上等。

ノーヴェは鞆を投げ捨てる。

「防護服と武装をお願いします」

「いらねえよ」

危険だから。霸王は遠回しに言いたかったのだろう。

しかし、ノーヴェは関係無い。自惚れなら、このまま叩くまで。

「……そうですか……」

あくまで無表情。瞳の中も揺れている様子はない。

「……よく見りゃまだガキじゃねーか。なんでこんな事をしている？」

改めて 霸王 を見る。まだ充分に若い。外見は大人でも、中身はまだまだガキだ。

——アイツとは違って。

「……強さを、知りたいんです……」

その一言に、どれだけの思いが込められていたのか。

「ハッ！ 馬鹿馬鹿しい」

そんなこと、知ったこっちゃない。

——ガゴンンッ！！

刹那。

瞬きを上回る速度でノーヴェが飛び出し、膝蹴。 霸王 は腕をクロス。重々しい音。

更にノーヴェの右拳が電気を運び、そこへと当てられた。

（……完全に受け切った）

小さく舌打ち。

今のは本気とまではいかなくとも、それなりの一撃だ。

マトモに受け切る、というのは言うだけのことはあるということ。

ポケットからあるものを取り出し、

「ジェットエッジ!!」

『Start up』

ジェットエッジを起動。バリアジャケットに、両足にはローラーブーツ。蹴技を主体とした戦法を得意とするノーヴェのスタイルだ。

「ありがとうございます」

霸王 は調子を変えることなくそう言った。しかし、その表情が微かに、ほんの僅かに変わったように見えた、認めてもらえた。脅威として。これで本気で出来る。

「強さを知りたいって、正気かよ?」

ノーヴェは問う。

本当、そんなことの為なのか。

「正気です。そして、今よりもっと強くなりたい」

しかし、霸王 は怯まず。逆に正々堂々と口を開いた。

「ならこんな事してねーで、真面目に練習するなりプロ格闘家目指すなりしろよ!」

こんな事。ノーヴェには、こんな事でしかない。
相手はそんなんじゃないのだろう。ここまでやる奴だから。
でも、それは間違っている。

“強さを知りたい”

だからと言って、格闘家に勝負を吹っかけてのこのこ勝つなど、
間違っている。

「単なる喧嘩馬鹿ならここでやめとけ。ジムなり道場なりイイ所紹
介してやつからよ」

今ならまだ間に合う。馬鹿にならなくても済む。大事になる前に
防げる。

しかし、

「……ご厚意痛み入ります。…ですが、私が確かめたい強さは――
――生きる意味は、」

霸王 の雰囲気が変わる。

「――表舞台にはないんです」

構えた。

互いの距離は約10m。ノーヴェは首を傾げた。
この距離、明らかに拳の間合いではない。

射撃？ 空戦？

様々な予測が思考する。

——が、ノーヴェはその全てに裏切られる。
そう、絶対に来ないと予測していたその攻撃。

「——つて!？」

ゆらり、と。 霸王 が揺れたと思った瞬間、目の前にまで迫られていた。

(突撃!?)

一番可能性は低いと意識していた。
だからこそかもしれない。

間一髪、紙一重で初撃を掠りながらもなんとか避けた。

速い。否、その独自の歩法が極限までに無駄な動きを無くすることによって速く見える。

地面に着く瞬間、右足で軽くタップ、本命の逆足で地面を削り蹴る。

それだけの行動の中で無駄に無駄な全てを排除した瞬動。これはまささに、格闘家。

——ドンッッ!!

「がッ……!？」

体が追いつかない。

自身の動きにまだ無駄がある。

そこを突かれた。

ノーヴェの腹に、一撃。

ジェットエッジを高速回転させて後退し、威力を軽減させる。

「列強の王達を全て倒しベルカの天地に覇を成すこと。それが私の成すべきことです」

「寝惚けたこと抜かしてんじゃねえよ！！」

ノーヴェが飛び出し、拳を振るう。

霸王 はただ捌き、反撃。負けじと拳が飛ぶ。

「昔の王なんざ皆死んでる！！ 生き残りや末裔達だって普通に生きてんだ！！」

ガガッ、と互いの攻撃がぶつかり、相殺。

「……弱い王なら、この手で屠るまで」

退かない。

否、退けない。

王はもう、関係無い。

ましてや彼女達は、

——何も弱くなんかない。

「この、バカつたれがッッ！！！！！」

ズドンっ、とノーヴェから魔力が溢れだす。

「ベルカの戦乱も、聖王戦争も、ベルカって国そのものもッ！！！」

エアライナー！

空中へと道が出来上がり、 霸王 の下へと繋がる。

その上を疾走、一気に距離を詰める。

同時にバインドも嵌める。

「もうとつくに終わってんだよッ！！！」

魔力がローラーブーツに込められ、道との摩擦で火花を散らす。

「リボルバーアア……！！！」

ダンッ！ と道を蹴り、右足を引いて、

「スパイクッッ……！！！！！」

ゴオオンッッ……！ と。必殺の一撃は確実に 霸王 へと叩き込まれた。

「ッ！？」

が、しかし。

「終わってません」

必殺の一撃だ。それだけの一撃を叩き込んだ筈。確かに効いてはいたようだ。口内が切れたのか、口端からは血が流れている。

「私にとっては、まだ何も……」

ギチッとノーヴェの身体をバインドが絡め取り、身動きが出来なくする。

（カウンターバインド！？ …狂ってる…。防御を捨ててこのバインドなんて……）

「霸王……」

スッと右手を上げる。

霸王の、一撃必殺。

「断空拳」

ドゴンツッ！と。無防備なノーヴェに力強い一撃が叩き込まれ、その場に崩れ落ちた。

「……弱さは罪です。弱い拳では、何も守れないから……」

背を向け、その場を去る。もう用はない。

彼女は王について話す気はないし、強さも証明した。

「弱さは罪。その罪を持つ者など世界に「ごまん」といえるであろう?」

刹那、目の前から声がかかる。

黒の短髪に紅の瞳。

鴉魔紫之、改め、シノ・カラスマだ。

彼はまるで最初からそこにいたと言わんばかりに悠然と佇んでいた。

「昨日ぶりであるな 覇王 よ」

5 'Strike Arts' (後書き)

今回の後書きはおやすみ

次話またかなり先になるかもしれませんが。
ご了承ください。

紅様。ご感想ありがとうございました。

次回、『6 'Heart'』

お楽しみに。

EX 'Magical Girl Lyrical Nannoha Vivid

お遊びみたいなものです

オリジナルから

キャラクター選択……………【シノ・カラスマ】
 キャラクター特性……………【オールアツ全格闘技】「氣」【MP減少量半減】

容姿：黒髪紅眼。普通の人よりは一回り良い身体。

身長：172cm

体重：57kg

魔力光：紅

魔力ランク：A+

所持デバイス：ナシ

備考：「〜である」という独特な口調をしている

（本人曰く“コンプレックス”でありクセらしい）

・ 氣の色はランダムに変わる

■ 0・キャラクター選択時

「出番であるな」

■ 1・戦闘開始時

「よろしく、頼むのである」

■ 2・ボス戦

「主、どれくらい耐えられるであろつな？」

■ 3・好敵手

「久しいのである」

- 4・勝利
- 「勝ちである」
- 5・圧勝
- 「もつと鍛えてから来るのであるよ」
- 6・ギリギリ勝利
- 「中々の手際であつたな」
- 7・敗北
- 「むう……納得いかないのである」
- 8・惨敗
- 「……………」
- 9・惜しくも敗北
- 「……まあ良かろう」
- 10・一対多 勝利
- 「量だけでは無理であるよ」
- 11・一対多 敗北
- 「……それは反則であろう……」
- 12・タイムアップ勝ち
- 「……逃げ切つた、であるか……」
- 13・タイムアップ負け
- 「むう、逃がしたのである」
- 14・ドロー（引き分け）
- 「惜しかったの……」
- 15・弱攻撃
- 「ハアッ！」
- 16・中攻撃
- 「ゼアアッ！」
- 17・強攻撃
- 「アゝアゝアアゝアゝッ！！」
- 18・チャージ攻撃チャージ
- 「……集え」

- 19 ・チャージ攻撃（実行）
「氣龍爆震！！」（かめ。め波な感じ）
- 20 ・弱ダメージ
「ぬ……」
- 21 ・中ダメージ
「グウッ……！」
- 22 ・強ダメージ
「グ、オオッ！？」
- 23 ・ダウン起き上がり
「ぬう、掬われたか……」
- 24 ・受け身
「甘いのである！」
- 25 ・瀕死
「……動けぬ、か……」
- 26 ・降参
「お手上げである」
- 27 ・謙遜
「うむ、流石であるぞ」
- 28 ・復活
「なめるでない」
- 29 ・回復
「よし」
- 30 ・自己回復
「氣力回復！」
- 31 ・味方回復
「共に行くぞ」
- 32 ・防御
「ぬるい」
- 33 ・完全防御
「ぬるいと言っている！」

- 3 4 ・回避
- 「ふん」
- 3 5 ・完全回避
- 「見え見えである」
- 3 6 ・毒、D o t 状態
- 「中々に挟い」
- 3 7 ・スタン、ぴより状態
- 「ぬ、うう……」(静止状態)
- 3 8 ・よろけ、レバガチャ状態
- 「の、オッ……」
- 3 9 ・ノックバック
- 「チッ……」
- 4 0 ・スタミナ・M P 切れ
- 「む、しまった……」
- 4 1 ・パワーアップ
- 「氣限突破!!」
- 4 2 ・コンティニュー
- 「もう一度、やるのである」
- 4 3 ・死亡、G A M E O V E R
- 「……………」
- 4 4 ・怒り、覚醒状態
- 「自惚れがアッ!!!!」
- 4 5 ・特殊アクション、アピール
- 「氣 は絶対に破れぬよ」(掌に 氣 の炎を出す)
- 4 6 ・待機
- 「ゆつくりのんびり待つのであるよ」
- 4 7 ・挑発
- 「主、本当に自惚れであるな」
- 4 8 ・死亡フラグ
- 「少し、嫌な予感がするのである」

[illegible]

「遅いのである」

←

（拳を突き出し、
氣の奔流が相手を飲み込む）

←

(終)

キャラクター選択……………【ミクト・ランウエル】

キャラクター特性……………

【全範囲】 オールラウンダー

【自動防御】 オートガード

【MP減少量+

1

身長：ヴィヴィオより少し（1、2cm？）小さい
体重：不明

魔力光：新緑・若葉色

魔力ランク：S+

所持デバイス：クラッツ（インテリジェントデバイス）

（トッファー近距離・ハンドガン中距離・マテリアルライフル遠距離に変形）

備考：特になし

■ 0・キャラクター選択時

「頑張ります！」

■ 1・戦闘開始時

「よろしくお願いします！」

■ 2・ボス戦

「う、どうしよう……」

■ 3・好敵手

「さあ、やるよ！」

■ 4・勝利

「やったー！」

■ 5・圧勝

「だいしょーりー！」

■ 6・ギリギリ勝利

「あ、危なかった……」

■ 7・敗北

「あうう……」

■ 8・惨敗

「全然ダメだあ……」

■ 9・惜しくも敗北

「ああッ！ 惜しかったのにい！」

■ 10・一対多 勝利

「どうだ！」

■ 11・一対多 敗北

「酷いよお」……」

■ 12 タイムアップ勝ち

「セーフ……」

■ 13 タイムアップ負け

「にやあ！ 勝ち逃げズルい！」

■ 14. ドロー（引き分け）

「またいつか、お願いしますね！」

■ 15 弱攻撃

「おりゃ！」

■ 16 中攻撃

「せいッ！」

17. 強攻撃

「行っけえーッ！！」

■ 18 チャー・ジ攻撃

「スタードライブ……」

■ 19 チャージ攻撃（実行）

「キルブレイカー……!!!!!!」
(収束砲)

■ 20 弱ダメージ

「痛いッ！」

■ 21 中ダメージ

「うあッ!？」

■ 22 強ダメージ

い
い
い
い
!?
?

■ 23 ダウン起き上がり

「いたたた……」

■ 24 受け身

「よいしょお！」

■ 25 瀕死

「あれ、体が……」

■ 26 降参

- 「ご、ごめんなさいい！」
- 27 ・謙遜
- 「すごいですねッ！」
- 28 ・復活
- 「もう、一回！」
- 29 ・回復
- 「ふう……」
- 30 ・自己回復
- 「よし！」
- 31 ・味方回復
- 「さあ、頑張ろう！」
- 32 ・防御
- 「おっと」
- 33 ・完全防御
- 「甘い！」
- 34 ・回避
- 「うわわッ！」
- 35 ・完全回避
- 「つ、と……」
- 36 ・毒、Dot状態
- 「うえ……気持ち悪いよ……」
- 37 ・スタン、びより状態
- 「ああ……星に手が届くよ……」（静止状態）
- 38 ・よろけ、レバガチャ状態
- 「あああう」
- 39 ・ノックバック
- 「うわあッ！」
- 40 ・スタミナ・MP切れ
- 「ヤバッ！」
- 41 ・パワーアップ

「行つくぞおおおおッ！！！！」

■ 4 2 . コンティニュー

「もう一度、お願いします」

■ 4 3 . 死亡、GAME OVER

「ゴメン、なさい……」

■ 4 4 . 怒り、覚醒状態

「ふざけんなッ！！」

■ 4 5 . 特殊アクション、アピール

1、「クロス！」（クラッツをトンファーに）

2、「ミドル！」（ハンドガンに）

3、「ロング！」（マテリアルライフルに）

2の時、偶に「ダブル！」で2丁のハンドガンに。

■ 4 6 . 待機

「ふぁ…眠いよ……」

■ 4 7 . 挑発

「あ、あああなたなんて僕より弱い！！」 ↑挑発ニガテ、怒られるから怖い。

■ 4 8 . 死亡フラグ

「またさ、一緒に遊ぼうよ！」

■ 4 9 . 火事場の馬鹿力

「まだ、まだあああああッッ！！！！！」

■ 5 0 . 奥義炸裂

「隙アリ！ クロス！ だああああッ！！！」

（トンファーで打ちまくる）

←

「ミドル！ ダブル！ 連射あッ！」

（魔力弾をとにかく撃つ）

←

「ロング！ マグナムシュート！」

（大きい魔力弾を撃ち込む）

「バインド！ 行くよ、クラッツ！」

（相手にバインドを仕掛ける）

「スタードライブ……キルブレイカー、フルバーストオオオオオオオオオオッッッッ！！！！！！！！！！」

(收束砲)

←

「どうだ、すごいだろ！」

(終)

*
*
*

続々追加予定

EX 'Magical Girl Lyrical Nannoha Vivid

オリキャラはまだ出てきますので、またその時にもやってみようか
と思います。

ではまた次回。

6 / Heart

「昨日ぶりであるな 覇王 よ」

最初から聞いていた。

最初から見ていた。

最初からここにいた。

彼は物静かな雰囲気だけでそれを語る。

憤慨する訳でも、悲哀する訳でも。一つとして感情を表に出さぬ
まま、苦笑して口を開いた。

「……一昔。大きな武道世界大会が開催された」

ポツリと。まるで子供に絵本を読み聞かせるように。

「ある少年は優勝を狙い、全力で参加。そしてそこに、同じ目標を
持った貧乏な少年が相手となったのである。同じ“目標”を持つ者
同士、全力で拳を交え、貧乏な少年にある少年は圧勝してしまった
のである」

そこでふと、シノの表情が少し暗くなったような。そんな気がし
た。

「少年は次へと駒を進めることとなるのである。しかし、貧乏な少
年は負けを認めなかった。否、認めたくなかったのである。二人の
少年の“目標”は同じ優勝。しかし、“目的”は全く違ったのであ
る。貧乏な少年は、優勝賞金を不自由な家族の為に目指していた。
しかし、ある少年はただ頂点に立つ。それだけの下らぬプライドだ

けであつた」

淡々と語るシノ。

霸王 には見えた。その顔が罪悪感に染まっていたのを。

「嗚咽し、憤怒し。家族の為と少年は何度も説得した」

一瞬。シノの眉が動く。

「……悲痛であつた。問答無用。ルールはルールであると当然のようにつき返された」

一度目を閉じ、また開く。その時には既に暗い表情は欠片も残されてはいなかった。

「……“弱さは罪”。……一体誰が罪人であるか？」

歪む。自分の顔が。

……そして、シノの顔が……。

「貧乏な少年は何もしてはいなかった。ただ、辛い思いをする家族が為に、全力で望んだ。そんな少年に立ちはだかつたのは、ただの下らぬプライドを掲げた少年であるぞ……。一体誰が罪人と言える……？」

決まっているであらう？

シノは視線でそう語った。

グラリと視界が揺れる。

「っ、あ……」

ダメージ。先程防御を捨てて受けた一撃が大分効いてきた。

——ここで倒れたらいけない。

しかし、体は言うことをきいてはくれない。

膝から力が抜けて崩れ落ちる。

眠い。今はただ力を抜いて休みたい。

意志と本能は相対し……。

最後に、シノの表情を見た 覇王 は意識を手放した。

夜の涼しい微風が頬を撫でる。

気分が冷め、今までの“自分”が戻ってきた。

「ノーヴェ殿、連絡の方はどうであるか？」

「とっくにやったよ…、ってか、カラスマ。お前いつからいた…？」

「ふむ。『ストライクアーツ有段者、ノーヴェ・ナカジマさんとの件からであるよ』」

「最初っからかよ……」

つまり、つけていた、という訳である。

「事情聴取もあるのであろう?」

「ああ。接触したんだし、仕方ないよ」

大の字で寝たままのノーヴェ。ダメージはなの相当だろう。

「……カラスマ……いや、シノ」

「なんであるか、ノーヴェ殿?」

「ああ、いや……。両親とか連絡は良いのかな、ってな……」

「……確かに、今日は帰れそうにない……が、連絡は必要ないのである」

「……それって一人暮らしって訳?」

「うむ」

自慢する訳でもなく、シノは一つ頷いた。「……まあ珍しくもないか……」とノーヴェは取り敢えず相槌をうつておく。

「の、ノーヴェー!」

と、遠くから女性の声が聞こえてくる。気配は二つだが。

藍色の髪をショートカットにした女性と橙色の髪をセミロングにした女性二人だ。

「スバル、ティアナ。すまねえ……」

知り合いだろう。よそよそしさは全く無かった。

「そこで倒れてるのが 霸王 さんだよ」

視線で示す先には倒れている碧銀髪の女性。

……すると、見ている先で光りだして、次の光が晴れた瞬間には少女となっていた。

「……やはり、な……」

シノは一人、予想していたように息を吐きながらそう言った。

「こんばんは、ね。貴方、名前は？ あたしはティアナ・ランスタ
ー」

「スバル・ナカジマです」

「シノ・カラスマである」

「である」と言う口調に首を傾げたスバルだが、ティアナは後で聞くとしてスルーしておく。

「取り敢えず運ぶわね。スバルはノーヴェを。あたしがあの娘も運ぶから」

「あいや、りょーかいッ」

テキパキとその場を片付けたティアナはシノへと振り返る。

「えっと、シノさんだっけ？」

「うむ。カラスマでもシノでも構わんのである」

「じゃあシノさんも取り敢えず着いてきてもらえるかしら？ 事情聴取とか色々、聞きたいことがあるし」

ティアナの言葉に「了解である」とシノは答えた後、二人を手伝ってからナカジマ家へと同行。そこで一晩過ごすこととなったのであった。

* * * * *

翌朝。

明るい光が窓から綺麗に整理された部屋へと降り注ぐ。
春の柔らかな日差しはベッドで寝ている少女を照らし、優しく起こした。

「……ん……っ、ッ!？」

ガバツと起きて周囲を確認する。知らない部屋だ。

「やっと起きたか」

横から知った声がかかる。
ノーヴェだ。

しかし、それより。

「……あの、ここは……？」

自宅ではない。

では、どこ？

——コンコン。

軽やかなノック音。ノーヴェが「はい」と言うと一人が部屋へと入ってきた。

「おはよ、ノーヴェ」

入ってきたのは、ティアナ。

「それから……、」

と 霸王 の方を見て続ける。

「自称 霸王 イングヴァルト。本名、アインハルト・ストラトス
St・ヒルデ魔法学院中等科一年生」

自称 霸王。

それは、中等科の一年生。たかだか13歳の少女であつた。

——何故わかる？

自称 霸王 ——アインハルトの虹彩異色の瞳が微かに揺れる。
それを見てか、ティアナが私物は全て見させてもらった、と謝る。

「制服と学生証持ち歩いてつとは、随分とぼけた喧嘩屋だな」

「……学校帰りだったんです。それに、あんな所で倒れるなんて……」

ノーヴェの気遣いか。彼女のちょっとした小言（そつぽ）で済むのかは不明だが、にアインハルトは顔を赤くしてぷいっ（そつぽ）と外方を向いた。

倒れるのは予想外だった。彼女の一撃が効いて、それが“彼”との時に現れて……。

「……あ、そう言えば……、」

と思い出す。昨日の“彼”の姿が見えないではないか。

「……すみません。あの、シノさんは……、」

「シノなら隣の部屋だよ。いくらなんでも同年代の少女と相部屋なんて駄目だ」

そもそも本人が滅茶苦茶否定してたし、と付け足す。

ノーヴェは笑っている。が、アインハルトは少し沈んだ表情になった。

思い出す。彼の言葉を。彼の姿を。彼の悲しみを。

「あー、言っておくがな、」

と、ベッドから降りてシノの元へと行こうとしたアインハルトに向かってノーヴェは言った。

「身だしなみはきちんと整えろよ?」

自分の姿をしてみる。

上下とも、一枚だけ。

……………この後アインハルトが真っ赤になったのは言うまでもないだろう。

6 'H e a r t (後書き)

後書きやっぱやめます。

なんだか面倒つていうのが本心。

次回『7 'Y o u』お楽しみに〜

7 / You

アインハルトはスバル作の朝食をいただき、ワンピースに着替えてからシノのいる部屋の扉の前で止まる。

——弱さは罪。

自分の言った言葉に、シノはどこかショックを受けていたように見えた。あのポーカーフェイスの得意な彼の表情が僅かだが哀しさを醸し出すくらいに。

「……アインハルトよ。どうかしたのであるか？」
「ッ!？」

と、部屋の前で躊躇っていると中から声がかかった。

その声にビクツと肩が震えてやっぱり止めようかと思った。が、中から扉が開けられてシノが不思議そうな表情で出てくる。……思えば彼の場合、こんな所に立っていれば気配を感じ取るなんて朝飯前だ。

「あ、えと……」

上手く言えない。

——昨日のことについて、お話がしたいんです。——
ただ一言なのに。喉まで出かかっているのに。

「用があるのであろう？ 借り物の部屋で自由に使う権利は無いが、まあ入りたまえ」

それを察しての行動なのだろうか。シノはいつもと変わらず、ただ平然とアインハルトを部屋へと導く。

……しかし、彼女はどことなく感じていた。

——彼の声いつもの調子があまり感じられないことを……。

「悲しい顔であるな。……まあ自分が言う資格なぞ持ち合わせている訳でもあるまいが……」

予めセットされていたようにそこにあった向かい合うよう置かれた椅子にアインハルトは腰を下ろす。

シノも対面に座って、しばらく沈黙が流れる。

アインハルトは自らその沈黙を破った。

「……あの、……昨日……のことなんです……」

しどろもどろになりながら、ぼそぼそとした小さな呟きのようなものになってしまった。

しかし、彼女にはこれが精一杯。まだ心の準備が出来ていなかったのかもしれない。

だがもう今更止めようたって遅い。こうして口を開いてしまった以上、自分から閉じるなどもってのほかだ。

「その、シノさんを傷付けてしまったのなら、謝ります。……です
が……、」

……、と、言葉に詰まってしまふ。

これは、彼に言えばそれだけ彼を傷付けてしまっただろう。

しかし、

「……………ですが、これは私の信念の中にあります」

信念であり、存在理由。 カイザーアーツ 霸王流で、誰よりも強くあること。

「昨日のことは、謝ります。申し訳ございませんでした。でも、私は私でありたい」

曲げられない。やり遂げられなかった“彼”の為にも。

「……………なるほど」

暫くの沈黙の後、シノは深く頷き、苦笑した。

「流石は 霸王 。凡人よりずっとずっと良き信念であるな」

完敗である。声には出さなかったが、彼の表情はどこか語っていた。

そう言えば、

「それより」

何となく、肩が軽くなったなあ、なんて感じた時。

「まあ、涙ぐらいは拭いた方が良いでしょう」

ハンカチを投げてきたシノが言った。

ふと頬を撫でてみると、湿っていた。

……思えば、無意識だったのかもしれない。“あの別れの時”や
“誓った時”様々な 記憶 が頭の中でごちゃごちゃに再生されて
何が何だか自分でもわかっていなかった気がする。

「……………シノ……………」

「ノーヴェ殿、朝早くからご苦労である」

部屋の扉からノーヴェが見ていた。明らかに視線は白い。白すぎる。

「お前、少女を泣かせるとはどういう神経してんだ!!」

……………
……………、

「……………
……………は？」

初めてかもしれない。シノがここまで困惑したような表情をしたのは。

状況を全く理解していない顔だ。

それを見てアインハルトはハッと我に返る。

実はさっきまで、と言うより現在進行形で知らず知らずの内に泣いていたのでは？

「ツツ!!?」

刹那、顔を真っ赤にして部屋を飛び出し、洗面所へと消えた。

「……シノ、話ぐらいは聞いてやる」

ノーヴェからは、泣かされたアインハルトが部屋を飛び出し、泣かした張本人^{シノ}がそれを見てヘラヘラしているように見えていたのだ。

……完全なる大きな誤解である。

「まあまあ落ち着くのであるよ、ノーヴェ殿。ここは一つゆっくりと語り合い「スバル、ティアナ！！」シノがアインハルトの奴を泣かせやがった！！」話ぐらいは聞くと聞いたのは誰であるか！？」

……結局、三人に叱られかけたシノが事実を言うにはアインハルトが帰って来て本人からの助け船が出るまでずっと言えなかったのであった。

その間、シノは一人アインハルトのことについて様々なことを考えていた。

（ノーヴェ殿に相談であるな。……これが終わってからであるが……）

彼はきつとこの先苦労するに違いない。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

St・ヒルデ魔法学院図書館。

「……つと。あ、レイ、そっちのも頼める」

「あいよつと……『古代ベルカの歴史』、コレか？」

「ありがとう」

ミクトはヴィヴィオの頼みを引き受け、とあるジャンルの本を探していた。

その傍らにはヴィヴィオ達とはまた別の人物が一人。

真紅のショートカットに二本の長いクセ毛が印象的で瞳は空色。スカイブルー
中性的な顔立ちだが、それでも立派な男の子（娘？）である。

名前はレイ・クロードア。ミクトとヴィヴィオの幼馴染みで、
初等科一年生から大親友の仲にあり、ふざけたり遊んだりとにかく
く正真正銘裏切り要のないダチであるのだ。

「しつつかし、珍しいモンだよなあ」

手の中にある数冊の分厚めの本に目を落とすレイに、ミクト「何が？」なんて聞いてみる。

「^{アイツ}ヴィヴィオがいきなり「こころ辺の勉強するー！」なんて言うからさ。一体何があったのやらってな」
「ああ。それなら、ノーヴェさんがヴィヴィオに頼んだんだよ。一緒に勉強したい、ってね」

「へつくちー!!」

「?? ヴィヴィオ、風邪？」

「ふえ？ 全然元気だよ？ 誰かヴィヴィオの噂でもしてるのかなあ……？」

「ハックションー!!」

「おろ？ ノーヴェがくしゃみなんて珍しいね？」

「誰かの噂かしら？」

「……少しも風邪の事は考慮しないのであるか……」

「そこ、うつさいー!!」

「……色々あったんじゃない？ まあ僕らが気にするようなことじ

やないと思うよ」

「色々、ねえ……」

今度聞いてみるかー、と一人ごちり、二人はヴィヴィオ達三人の元へ。

「二人ともおかえりーッ」

一緒にいたりオが手を振る。両手が塞がっていたミクトは苦笑し、レイは「よう」と片手を上げて返した。

「頼まれたブツは、」

「持ってきたよ」

ざつと約10冊。その全てが古代ベルカ関連——シュトウラの昔話や伝記等々——になっている。

「ありがとうッ！」

嬉しそうに微笑むヴィヴィオにミクトは照れながら苦笑し、レイは当然と言わんばかりに軽く済ました表情を作る。

二人とも昔から変わらない友人だ。

「あ、そう言えば！」

ふと、思い出したようにヴィヴィオが本から顔を上げる。

『古代ベルカの歴史』をパラパラと捲っていたミクト。

欠伸をしていたレイ。

一緒に同じページを見ていたりオとコロナ。
全員がヴィヴィオに視線を向ける。

「ノーヴェがまた新しく格闘技やってる子と知り合ったから、一緒に練習しないかって」

「（……また？ ミクト、どーいうことだ？）」

「（多分“また”って言うのは前も一回知り合った人がいてね。シノ・カラスマ先輩。中等科一年の次席で、格闘技が無茶苦茶強い人）」

「（……そりゃまた結構な有名人に出会ったなあオイ）」

知らず知らずの内に、レイは苦笑していた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8932v/>

魔法少女リリカルなのはViVid ~ RUN,RUN,RUN!! ~

2011年10月31日02時15分発行